

2022/6/10

『平和研究への見方』 第5回：平和社会学研究会

小松 照幸

Email: tkomatsu8888@hotmail.com

【I】西原先生の「平和研究会」に参加する理由

- 最初の出会い；IFSSO(International Federation of Social Science Organizations)
(国際社会科学団体連盟)
世界の社会科学を代表する団体の連盟組織(但し、組織のメンバーシップは、これまでずっと
衰退し、アジア諸国のみとなっていた)
- IFSSOでの研究テーマ；各国共通の現代社会問題を取り扱う
(例) “Global and International Migration: Realities of Labor Movements and
International Marriages” (2009)

そこから学んだこと；

- * Globalizationによる人間の国際移動と相互依存の関わり
- * アジア・ネットワークの現状認識
- * 日本の役割と、その変化
- * 「日本学術会議」(Science Council of Japan)の存り方
(日本側、科学団体の中枢組織)

【II】今回、本研究会に参加する思い

- * 定年退職後の社会活動の有り方
2002年に立ち上げ(Original Member)唯一、継続参加する学会
「多文化関係学会」(JSMR: Japan Society for Multicultural Relations)
{学会の設立主旨}
- かけがいのない地球社会を守るために、多様な文化間の相互作用と関係性を、多面的かつ動的に
研究し、議論する場
- 個人レベルから組織・集団・社会・国家レベルに至るまでの諸問題を、文化性、および超領性
という視点を軸にアプローチする
- 日本と世界諸地域との比較文化研究や、日本国内の多文化についての研究を重視し、日本人の
異文化接触をめぐる諸問題を、言語、コミュニケーション、心理教育、ビジネス、環境、交流史
などを切り口として、多面的に取り組む。このような研究は、これまでの学問体系を横断的に
切り開くものであり、新しいパラダイムへの転換を目指す。

この学会は本年で20周年を向えるが、多文化間の関係性に於ける最重要課題は、いまだ明らかでは
ない。

*自身の切実な思い

- ① 平和は如何にして守られるか
- ② 人権や民主主義をどう守り抜くか
- ③ 日本社会と国民の安寧は、どう守れば良いか

上記①～③を破壊する根本的な力学は、何であるか？

これらの切実な思いは、昭和20年生まれの我々にとって、次の世代に平和をつなぐための最重要課題である。

*この切実な思いを待つ理由

- ① 過去数年間に及ぶ、自由民主党を中心とした政治家達（政府）の悪しきリーダーシップにより、戦後70年に及ぶ日本の民主主義に対する破壊の危機を身近に感じたこと。
- ② これと時を同じくする未曾有の自然災害の脅威と、ロシアによるウクライナへの侵略戦争による。

人々の日常生活を破壊する最大の悪は、未曾有の大量殺人、即ち「戦争」であることは論を持たない。我々は、今、その現実に生命の存在を脅かされている。従って平和研究の最重要課題は、大量殺人（戦争）の回避に有る。

この平和研究に限らず、関連する学問研究が、社会と人々の暮らしを破壊する要因を明らかにし、それらの研究成果が現実社会(Social Reality)の問題解決に貢献しなければ、貴重な研究成果は仲間内の自己満足で終わること。またその限界への無念さ。

【III】学問的興味と背景

1. 学部「経済学」(日本)

*富の公平な分配についての疑問

2. 学部「社会学」(アメリカ)

*アメリカ社会の多様性と合理性

*日米の社会構造の相違

*日米の社会心理の相違

*日米のコミュニケーションの相違

3. 大学院「カウンセリング心理学」

*人間の心の闇の深さに驚く！

*国籍、人種を問わず、人間共通の「心の病」に気付く！

*人間の心（心理）から社会の有り様（Social Reality）を見る目の重要性に気付く！

4. 大学院「比較文化心理」(日本) 英語での授業

*文化とは何か？

*文化心理から、国民の社会心理と社会行動について考える

*日本人の心性について仏教的背景による「心理療法」や「比較文化心

理」から考える

- * 「比較言語文化」や「言語臨床研究」から文化特性を考える。
日本語と英語の背景にある文化心理的な相違への興味

【IV】 平和研究の見方とそれへの期待

* 平和研究への問い

1. 世界平和の維持が、なぜ世界中の人々の暮らしにとって最重要課題であるのか？
2. 社会の平和と安寧を破壊する反社会的、反文化的力と課題は何か？
3. 平和研究の最も深刻な研究課題は、大量の破壊と殺人（戦争）である。
国民の人権、生存権を危機に陥れる愚かな政治のリーダーシップ（政府）に対する最も有効で重要な課題と解決のための手段は何か？
4. 科学の研究成果は、果たして地域紛争や戦争抑止に、明白な貢献ができてい
るのか？

* 第一次大戦

* 第二次大戦

* 20C～21Cの地域紛争、地域戦争

* ロシアのウクライナ侵略戦争

5. なぜ、ロシアによるウクライナ侵略戦争が、これほどまで世界中の人々に衝
撃を与えているのか？
6. 誤った政治のリーダーシップを抑止するための
 - ①政治システム
 - ②サイレント・マジョリティーへの最も効果的な知識と情報提供の手段と方法
 - ③ジャーナリズムはどうあるべきか？

* 社会構造の変遷と人間社会への関係性

1. 現代社会に於ける、民主主義と反民主主義との相克（歴史的視点： 古代、中世、近世、現代）
2. 社会システムの変遷
狩猟的社会、身分制階級社会、絶対王政社会、専制君主社会、近・現代社会
（共産主義、社会主義、民主主義など）
3. 人間社会の構造的関係性：
個人→家族関係→地域コミュニティー → 都道府県レベル、国家レベル
→ 民族関係、宗教関係など

* 国家とは：人口、国土、経済力などの強弱、大小はあるが、国民を統合する 社会的制度、仕組み。

* 国民とは：いわゆる多様で複雑な社会制度・仕組みに包含される人々、市民

* 国家と国民の違いとは：国家は社会的制度・仕組みであり、国民とは人々で ある。
したがって国家と国民は峻別されなければならない。

* 政府とは：国家を動かす一つの機関である

* なかにし 礼 (本名: 中西 禮三 (なかにし れいぞう) 氏が語る。

小説家、作詞家

戦争をさせない 1000 人委員会より、Facebook (5/25/'22)

「戦争には、表と裏があるんだよ。」

「国家はね、いざとなるとどんな残酷なことでもする。嘘もつくし、国民を犠牲にすることを忘れてはなりません。」「命からがらたどり着いた祖国日本では、『満州、満州!』と蔑まれ、『お前たちに食わせる米はない』と小突かれる、つらい差別にもさらされた。」

「国に恨みもある。翻弄され、苦しめられた。しかし、その国に拾われ、育てられ、今日があるわけで、国に対する愛情はあります。」

しかし、●政府は国とは違う。政府は、国家を運営する一つの機関だ。政府を愛することはない。間違った運営をする政府には異を唱えますよ。」

「間違った政府と行動を共にしてはならない。どんなに蔑まれようとも戦争には反対をしてください。」

【V】 平和研究の最重要課題は何か？

1. 世界平和の維持が、なぜ世界中の人々の暮らしにとって最重要課題であるのか？

社会の平和と安寧を破壊する社会的、文化的課題は何か？

平和研究の最も深刻な研究課題は、戦争 (=大量の殺人) である。

2. では、戦争抑止における現代的課題は何か。

①政治のリーダーおよびそのリーダーシップを取る専制的政治組織と体制の病理

②政治の専制体制による戦争遂行を抑止し回避する健全な政治システム・体制の欠如
(戦争回避の為に組織・体制の機能不全)

③国民の無知、盲従

④ジャーナリズムの重要な社会的役割、即ち、社会正義に関する国民への広報能力、
アプローチの弱体化、無能化

「参考資料」

(出典) 東京新聞望月衣塑子記者と歩む会に出逢った人たちの会(6/2022)

〈ジャーナリズムとメディアの意味〉

* 「日本では『ジャーナリズム』と『メディア』という二つの言葉が恐らく意 図的に混同されて

使われるが、ジャーナリズムとは独立した知性を持つジャーナリストが政治や社会の問題を自分で認識し、市民／国民のために情報を整理分析して提示する仕事。

*メディアは、ただ情報を右から左へ移動させる仕事。例えば、無機物の『USB メモリ』は『ジャーナリズム』でないことは明らかだが『メディア』である。日本ではこの 10 年間のある時期から、ジャーナリズムがどんどん縮小し、政治や社会の情報を伝えるのはほとんど『メディア』になった。

*受け手はその違いに気づかなければ、力を持つ者はやりたい放題。私も字数が少なくて便利などの理由で『メディアはこの問題を報じるべき』という文章を使うことが少なくないが、本当は『新聞やテレビは単なるメディアでなくジャーナリズムの仕事をやせよ』と書くべきなのだろう。

メディアはただ情報を右から左へ移動させるだけの存在。首相や財務相が言ったことを、そのまま書き起こして記事にする。それを『中立』と勘違いする誤謬にメディア社員も堕ちている様子だが、それは単なる『責任逃れ』でしかない。独自の価値判断に基づく分析や論評、批判を行えば『責任』が生じるが、右から左への垂れ流し報道なら『責任』を負わずに済む(山崎雅弘さんが 5 月 26 日 18 時 46 分にツイート)

Masaki Nagamori

*メディアは 機器ですよ。機器は意志を持ちませんがマスコミは マスメディアを使ってそれぞれ独自の意志をそれぞれの観点から発信します。新聞社もそれぞれの立ち位置から政権を擁護したり批判したり、それ自体は健全な在り方だと思うのですが、政権や強い権力集団、個人や団体がマスコミを束ねて 偏った情報のみを流させたりすると民主主義は崩壊へと進みます。

言論、表現の自由は保証されなければ民主主義における自由な活動や考えを阻害して、専制政治へと向うからです。

3. 科学 (人文・社会・自然諸科学) は、戦争抑止に明白な貢献ができているのか？

第一次世界大戦

第二次世界大戦

20 世紀～21 世紀の地域紛争、地域戦争

ロシアのウクライナ侵略戦争

4. なぜ、ロシアによるウクライナ侵略戦争が、これほどまで、世界中の人々に衝撃を与えているのか？

5. 民主主義の脆弱性とは？

民主主義の脆弱性

「東京新聞望月衣塑子記者と歩む会で出逢った人たちの会」

(『未完の敗戦』『第二次世界大戦秘史』『歴史戦と思想戦』『沈黙の子たち』『戦前回帰』『天皇機関

説」事件』『日本会議』などの著書がある山崎雅弘さんが6月7日15時4分にツイート) 06/22

- * 「安倍晋三氏は2014年に『憲法が権力を縛るという考え方は古い』などとたわけたことを国会で述べましたが、権力者がそれまでのルールを破る言動をしても、処罰されず、周りがそれに合わせてルールの方をねじ曲げるというのは、まさに立憲君主制以前の絶対王政の発想です。
- * 王様気分。厄介なのは、権威主義的な思考の人間は、立憲君主制を含む民主主義よりも、支配者が誰なのか明確な絶対王政の方を好むということ。
- * 軍や警察は組織の性質上とりわけそうなりやすい。社会全体での民主主義の認識度が低いと、特定の支配者を頂点とする権力のピラミッド構造が簡単に出来上がる」

6. 病理現象から見る、個人から国民国家（マイクロからマクロ）までの課題は何か？

- ①人間の病理現象としての心、体、環境の問題
- ②個人の病理、家族の病理、地域社会の病理、国家・国民意識の病理、そして、グローバルな広がりを見せる宗教的、人種的、言語的、文化的同質性に内在する病理現象。

【VI】 病理現象から見る、個人から国民国家 (マイクロからマクロの視点) の課題

* 社会は個人 (individual) から始まり、集団や組織、そして社会 (Society) まで、人によって構成される総ての対象を表す。換言すれば「社会を構成する人々の関係性」でもある。(出典：池田健三、村田光二「認知社会心理学への招待」東京大学、1998 p.54)

* 病理現象は、本来人間の心身の健康に対する医学的知見に基づく所見である、が、個人のみならず国家レベルにおける人間集団（市民、国民）に関しても、人間の心と体の健康状態は、その思考と行動内容に重要な影響を与える。そして、様々な組織におけるリーダーと目される人間集団の精神と思考も、同様に組織の命運を決める。

その意味において、国家の命運を担う最も重要な社会的立場は、政治のリーダー達に帰属するといえるであろう。従って政治のリーダーである彼らの思考と精神と行動の健全さが、国民の人権、生存権などに決定的な影響を及ぼすことは、現在のロシアによるウクライナへの侵略戦争でも明らかである。

* 国民と国家の社会病理現象は、時代の社会的現実 (Social Reality) を具に観察し、人間の心の状態（精神分析、臨床心理など）と、社会の病（社会病理など）との強い関係性（認知社会心理学など）から、諸問題の解決策を見出さなければならない。

* 病理現象から見た個人、集団、国家のリーダーシップ

* 社会病理の実相：自殺、殺人、犯罪、非行、失業、貧困、幼児虐待など

個人の病理：
家族の病理：
小集団の病理：
社会の病理：
国民の病理：
国家を統括する政治リーダーの病理：

病理現象から見る「戦争と平和」：「戦争は人の心より始まる！」} UNESCO 憲章

* 平和維持と戦争回避の為に、解決されなければならない課題は何か？

1. 戦争が起きて、それが収束するには、どれだけの破壊が為さなければならないか。
未曾有の破壊、殺戮、死者数、殺人兵器の使用、膨大な国家予算の消費
2. 戦争抑止に必要な条件とは何か。
 - ①人の命に対する深い重いを醸成する情動を伴う体験教育
 - ②心の深層に届く戦争体験の継承
 - ③最も賢明な政治リーダーを選べる選挙制度
 - ④反社会的、あるいは破滅に導くような政治リーダーに対する確実な弾劾制度
 - ⑤国民の知る権利、自由で公正な情報伝達の保証制度（健全なジャーナリスト、ジャーナリズムの確実な身分保障制度の確立、決して公権力の悪しき手先とならないこと）
 - ⑥国家権力としての警察、軍隊が、国民の自由、人権、生存権を決して脅かすことが出来ない制度
 - ⑦その他国民の精神に平和の尊さを深く理解する、あらゆる働きが必要である

「参考資料」順不同

- 樋口陽一、大須賀明（編）「日本国憲法資料集」三省堂、2000
山口勸（編）「社会心理学」放送大学教育振興会、1994
M.H.シーガル、P.R.ダーセン、J.W.ベリー、Y. H. ポーティンガー
「比較文化心理学：人間行動のグローバル・パースペクティブ」上巻、下巻
北大路書房、1995
児玉克也、佐藤安信、中西久枝「はじめて出会う平和学：未来はここから
はじまる」有斐閣アルマ、2004
徳岡秀雄「社会病理を考える」世界思想社、1997
池田健三、村田光二「こころと社会：認知社会心理学への招待」東京大学出
会、1998
小此木啓吾「あなたの身近な：困った人たちの精神分析」大和書房、1996
波平恵美子（編著）「病むことの文化：医療人類学のフロンティア」海鳴社、1990